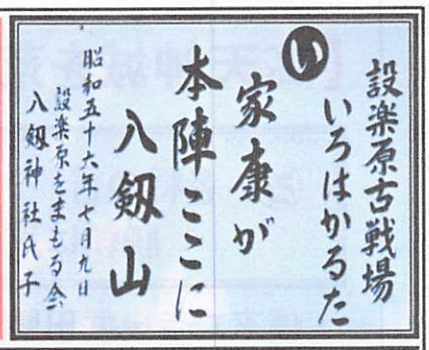
【徳川家康本陣地】(八劔神社)



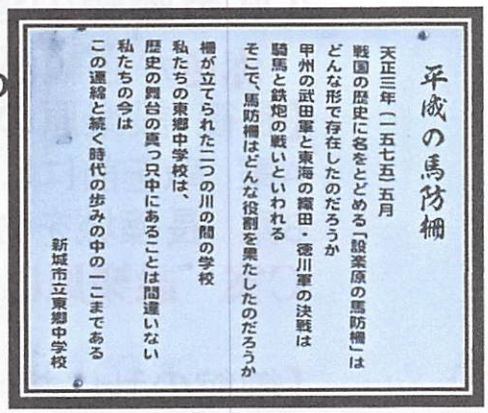
い　家康が本陣　ここに八劔山

・徳川家康本陣
竹広八劔神社

・徳川家康が戦地本陣を置いた、八劔神社は、東郷中学の西門の位置に在ります。創立年月日不詳 古来より八劔大明神と称され 祭神は【劔若御子天神】

・この地の領主は、慶長6年から再び設楽市左衛門になる。明治元年八劔神社と改名。本陣のここは弾正山の最西の場所です。

【八劔神社へのタイムスリップ】:中学の馬防柵のフェンス確認



場所　新城市竹広字宮川172番地

・もっくる新城の道の駅から、バスで馬防柵再現地への、大宮交差点を右折した所で、八劔神社が目の前に現れます。

・八劔神社は、竹広地区と大宮地区の一部の【鎮守】の森で、春と秋には、村祭りが行われます。昔は村芝居も手筒花火も盛大に行われていました。

・戦い時、徳川家康と織田信長は、弾正山の裏手側の窪地に大軍を隠して、いざ戦いが始まると、新手の兵士を次々に、前線に繰り出し、武田騎馬隊を悩ましたと云われています。

・この八劔神社周辺には、徳川家康軍の大軍が展開していました。

【南無八劔大明神、家康が乾坤一擲の戦いぶりとくと御照覧あれ！】

徳川家康本陣跡

天正３年(1575)５月１日　武田勝頼軍はここから東へ４ｋｍ離れた長篠城に攻撃を開始した。５月15日に長篠城の落城寸前の知らせを受けた徳川家康は、織田信長とともに設楽原に出陣し、５月18日に到着して「高松山、八剣高松山、弾正山」などと呼ばれたこの地に本陣を構えたと伝えられる。

ここから東へ300ｍ離れた場所に「長篠・設楽原の戦い」の決戦が行われた連吾川が所在している。また、250ｍ東へ行った地点には「家康物見塚(断上山第９号墳(愛知県指定史跡))」があり 戦いの最前線でかつ決戦場の中央部で陣頭指揮をした家康の姿を偲ぶことができる場所がある。

新城市教育委員会

【高天神城を落とした自信が裏目に出た】

ろ 老将の言
勝頼は封じたり

・名高田前激戦地
須長　名高田

・信玄亡き後武田勝頼は、諸将から期待と不安を寄せられる中、着々と美濃や遠江の、父信玄でも落とし得なかった【堅城の高天神城】を攻略した。まさに天正2年の勝頼は、自信に満ちて意気盛んな武田軍団の陣頭采配であった。【長篠・設楽原の戦い】でもこのことが、千軍万馬を経た老将たちの意見を無視した、武田軍の悲運の始まりでした。**【勝って兜の緒を締めよ】**

【武田勝頼の運命を分けた3つの選択決断】

赤色が勝頼が選択した決断

【長篠・設楽原の戦いの決断】
A案　敵を前にしての一時撤退
B案　長篠城を力攻めにして、そこでの籠城戦
C案　設楽原に打ち出して決戦を挑む

【御館の乱における支持の選択の決断】：外交政策の失敗
A案　上杉景勝派に味方➡➡甲相越の三国同盟の破棄
B案　上杉景虎派（北条氏政の弟）に味方➡➡景虎自刃

【再起を期した拠点の城の選択決断】
A案　真田昌幸の上州（岩櫃城いわびつ城）の選択
B案　防衛拠点として勝頼が築いた（新府城しんぷ城）の選択
C案　小山田信繁の山梨大月（岩殿城いわどの城）の選択

勝頼の選択

＊皆さんは、どの選択をしますか？

武田軍

突撃

五月十四日
武田勢突入

長篠城を取り囲んだ武田軍は、5月14日に弾薬庫と食糧庫に攻撃を開始します。

【羽柴秀吉の陣地跡　旗ぼこ】

㊧ はたぼこと
秀吉陣地の名を伝う
・牛倉　宗国

豊臣秀吉は、戦国一の出世頭　この戦いの前年に木下藤吉郎から羽柴秀吉に改めたとされ、この時39歳。織田信長の陣地茶臼山から、峰続きにある牛倉の宗国の高台に陣を構え武田軍の進軍を阻みました。
【はたぼこ】は羽柴秀吉が、陣地に多くの旗を立てて、勢力を誇ったところから名前が付いたと云われています。
【はたぼこ】からは、信長の本陣は目と鼻の先です。

・・羽柴と号す所以は、丹羽長秀と柴田勝家にあやかる称号なり。
羽柴秀吉は、この戦いでは馬防柵の構築の陣頭指揮に当たったと信長公記に記載されています。はたぼこの陣地は、雁峰山麓から武田軍を廻り込ませない位置に布陣しました。大将の織田信長の【横】と言うより【隣】の場所で茶臼山を守護する布陣です。
壮年有為の指揮官として【ひょうたん】の馬印を押し立てていました。
・藤吉郎として、信長に仕えたのが18歳。才覚を認められて足軽の組頭となり寧々と結ばれたのが27歳。墨俣に居一夜城を築き、城持ち武将になったのが30歳。その2年後には明智光秀と共に京都奉行に任ぜられた。
そして【長篠・設楽原の戦い】では39歳。着々と出世街道を駆け登って行きます。そして従一位関白の地位まで登り詰めます。
【出世階段の改名順】
＊木下藤吉郎➡木下秀吉➡羽柴秀吉➡藤原秀吉➡豊臣秀吉

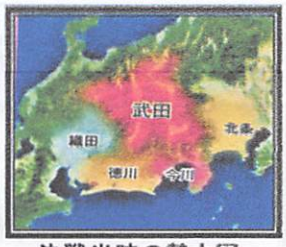
藤原秀吉に改名したのは1585年、翌年には関白となり豊臣に改姓しています。

【設楽原決戦場】

【連吾川と雁峰山】

に　日本の戦史　・国道151線 連吾橋

かえたる設楽原



決戦当時の勢力図

雁峰山

・この小さな小川が、【連吾川】です。かんぼう山を源流とする全長4キロほどの豊川へ注ぐ川です。雁峰山に向かって右側が、武田軍が11の部隊の陣を張った信玄台地です。

・左翼に山縣昌景隊、中央に大将の武田勝頼と内藤昌豊隊、右翼に馬場信房隊が布陣しました。左の山が弾正山で、遠くに織田軍・近くに徳川軍が、鉄壁の陣城を築き大量の火縄銃で、武田軍を迎え撃ちました。

【連吾川と雁峰山へのタイムスリップ】:川の狭さを体感

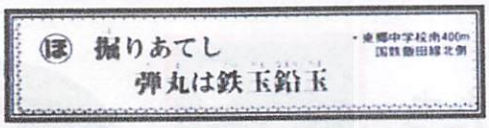
連吾川は、ウナギの寝床のような細長い川

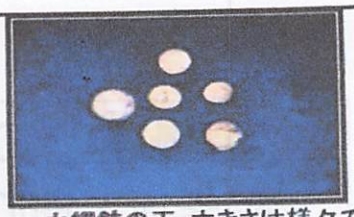
場所　新城市竹広字断上:連吾川竹広橋地内

- **設楽原の決戦は、日本の戦史を書き換える戦いになりました。**
  騎馬を使う伝統的な戦法は、近代的な【足軽鉄砲隊】に変わりました。
- 当時の雁峰山(かんぼう山)は、付近の37ヶ村が入会権を持つ草山で現在の様に、山々に緑で覆われた木々はありませんでした。
  戦後の植林で今の様な姿になりました。
- 連吾川は、雁峰山を水源地とする、【5キロ】ほどの豊川に注ぐ細い川です。弾正山と、信玄台地に挟まれたこの場所で新城市の人口以上の兵士が、壮絶な戦いを繰り広げました。
- 織田信長軍3万人と、徳川家康軍8，000人の連合軍3万8,000人と武田勝頼軍12，000人が【長篠城付城軍3，000人】がこの設楽原の狭い場所に集結しました。

武田24将を描いた絵の中の8将がこの戦いで命を失っています。

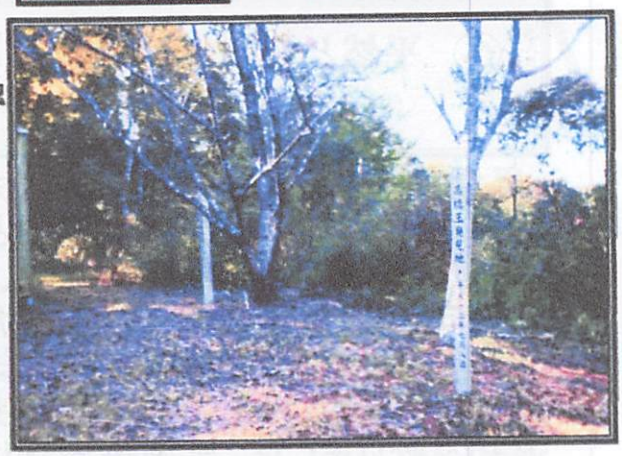
【火縄銃の玉発見地の標識】





・火縄銃の玉：大きさは様々です

＊設楽原の決戦場で発見された火縄銃の玉は現在20個発見されている。
そのうちの【19個が鉛玉】です。鉄玉の融点が1500℃、銅玉が1000℃、鉛玉が320℃で一番加工が容易であったことが影響していると思われる。
・ちなみに天下分け目の徳川家康と石田三成が戦った【関ヶ原の戦い】では1発の火縄銃の玉が見つかっていると聞く。



【火縄銃の玉発見地の標識へのタイムスリップ】:標柱の確認

場所　新城市竹広信玄原５５２番地

・火縄銃の玉発見者の内訳
・小学生4個　・地元の農家3個　・個人6個
・遺跡発掘7個　計20個の火縄銃の玉が、設楽原で発見されています。小学生発見の【高橋玉】は、課外活動で資料館に来ていた、山梨県の大和村小学校の高橋梓さんが見つけたものです。決戦の設楽原と、武田家終焉の地の大和村を結ぶ奇遇ですね！
・火縄銃の玉の発見された、最初の記録は【大正10年】頃です。連吾川の川沿いの畑で、当時の小学生が見つけています。
・戦い当時の、火縄銃の玉は多くは国産でしたが、火薬はほとんど【外国産】でした。大坂の【堺】が外国との貿易港でした。
火縄銃の玉は、当時兵士が造りました、玉の径は10mm程で銃に合わせて大きさは【まちまち】です。
・令和元年5月に、資料館裏のこの場所で50人規模の発掘作業が行われ、【天正3年の5月21日】に発射されたと思われる【鉛玉】が1個出土しました。発見者の名に因み【N山恵玉】と名前が付けられました。

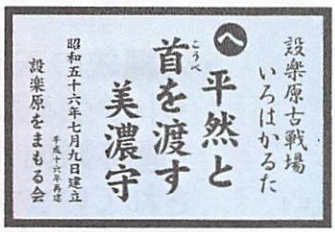
馬防柵から発射された、火縄銃の玉は資料館裏の林の中で多く発見されています。

【馬場信房の出沢の塚】
設楽原で倒れた戦国の武人たち

へ 平然と首を
わたす美濃守

・馬場信房の碑
出沢　銭亀

・馬場美濃隊は、開戦と同時に丸山砦付近で織田軍の佐久間信盛隊と激しくぶつかり、戦況が不利になると、勝頼本陣に向かい戦場からの引き上げを【進言】したとされます。味方の総崩れが起こる前に、少しでも戦力を残して退却を計りました。馬場美濃守は、【戦線ライン】を、寒狭川の右岸に張り押し寄せる追撃軍の中に再度身を投じ敵に首を与えたと伝われている。



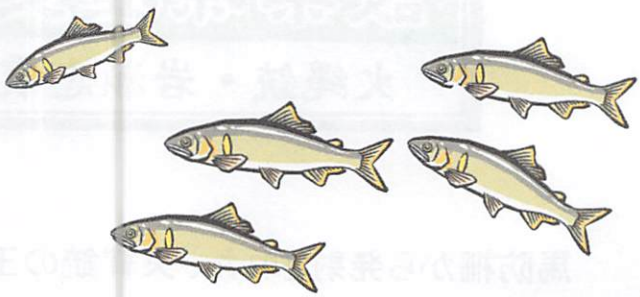
【馬場信房の塚へのタイムスリップ】

場所　新城市字出沢前畑(橋詰)

・馬場信房の塚は、 武田勝頼が寒狭川【猿橋】を越えて落ち延びるのを見届けた、横川の銭亀交差点脇に在ります。
ここは、決戦場の設楽原からの退却の道筋上になります。
大正3年に、長篠古戦場顕彰会により建てられた、高さ155センチ、幅120センチの【馬場美濃守信房之碑】があります。碑の隣には、明治26年に地元の今泉金次郎氏により建てられた【馬場美濃守戦地之墓】が祀られています。
・出沢地区の人々は、昔から忠烈な勇士馬場美濃守を祀って来ました。現在は、区総代が主催し毎年8月24日にお施餓鬼が行われています。近くには、名勝【鮎滝】があり笠網漁が夏の時期の風物詞となっています。
＊静岡大学名誉教授の歴史家小和田哲男氏も馬場信房の子孫です。

武田軍が総崩れ、連合軍が猛追

☛ 鮎滝の笠網漁



【設楽氏の領地だから設楽原】

と　樋田にて　退路をたちし設楽貞通

・設楽越中守陣地
塩沢　樋田

・設楽氏は鎌倉時代初期に、三河国設楽郡設楽郷が発祥だとされる。竹広設楽家は、設楽貞通の2男貞信を祖とします。徳川家康の家臣として小牧長久手の戦い、小田原征伐の陣に供奉し、大坂の夏の陣では伏見城の城番を務めた。子の設楽貞政は、竹広に陣屋を構え、七代目の貞喬の嫡男の貞丈の三男が岩瀬忠震です。一族は徳川幕府の旗本として使えます。

設楽家家紋　三つ盛り十二葉菊　聖堂山勝楽寺が菩提寺です。

【設楽氏ゆかりの城館へタイムスリップ】

＊①増瑞寺屋敷：（新城市富永字原ノ内）鎌倉期の居館跡で設楽氏発祥の地国道151号線の沿線にあります。

増瑞寺「構屋敷」

周囲の堀が南北に一四〇m東西一八〇mと、全体が城館であったという。残存する堀は西側の四五mだが、深さ五m幅六mと雄大である。

・設楽氏の最初の本拠と言われる

・寺の正面右手にある「元設楽氏居館旧御朱印地増瑞寺山門跡」の石碑が寺の歴史を伝える。

平成二十七年春
東郷の戦国史跡の会

＊②岩広城：（新城市富沢）1312年に築かれたとされる。別名岩広村広瀬城。設楽守通の別城とされています。豊川の広瀬岸にあります。

設楽氏の本拠岩広城

半場川が豊川に流れ込む地点に正和元年（一三一二）に設楽重清が城を築き設楽氏の本拠として次第に勢力を拡大した。

来迎松城や川路城も一族の城である。

・家康の関東移封により設楽本家は武蔵野へ移るが、その後、分家が設楽六か村を采地とした。

平成二十八年春
東郷の戦国史跡の会

＊③川路城：（新城市川路）別名大坪村古城。城跡に歴代城主が鷹狩の鷹の飼育に使用されたと伝わる「お鷹井戸」があります。城跡の西に小川路稲荷が残っています。新城川路駐在所奥にあります。

川路城址

設楽越中守貞通の居城跡。長篠・設楽原の戦いでは設楽氏の支配地が決戦場となった。

貞通は、川路対岸の日吉・樋田方面に布陣した。

・当時の設楽氏は、野田の菅沼氏西郷の西郷氏とともに野田方三人衆として結束していた。

・「お鷹井戸」は川路城の遺構。

・大坪村古城はこの城

平成二十七年春
東郷の戦国史跡の会

＊④来迎松城：（市内富永）城跡には稲荷大明神と宝筐印塔があります。

設楽氏の来迎松城

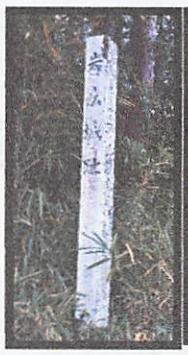
設楽氏は、平安中期以来、諸書に名をとどめる設楽郷の豪族で足利将軍の奉公衆である。

来迎松城は設楽氏の居館の一つ。その名は城入口にある二本松の間から朝日を迎えたからと伝わる。

・城址は鉄道で分断されているが、東北部に土塁の一部が残っている。

・この城は、後に、弓の名手夏目久四郎（家老）が守っていた。

令和二年二月　東郷の戦国史跡の会



【原隼人佑昌胤（まさたね）の塚】

設楽原に倒れた戦国の武人たち

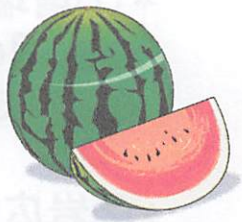
㋒ 治水にもつくせし
昌胤ここに死す

・原昌胤の碑
竹広　信玄塚南

・武田家譜代の重臣で、代々陣場奉行の要職を務め、地理に精通し、陣立て等の資料を作成しました【44歳】で、徳川軍との激戦の末この地で戦死。・火おんどりの【3本の種火】も、火元の旧庄屋の峰田家を出発して、火おんどり坂を進み、途中山縣三郎兵衛昌景の墓前に参り、鐘・太鼓、笛・松明の順に行列を組んでこの畑の前の道を進み、信玄塚に繰り込みます。

【原昌胤の塚へタイムスリップ】：畑には入らない

場所　新城市字山形望月家畑中



・原昌胤のお墓は、信玄塚の南西約100メートルの新城市竹広字山形537番地の3の平な畑中に在り、信玄塚の、小塚付近より畑の中に見える位置に在ります。
・原昌胤家は、代々武田の譜代の重臣であり、【陣場奉行】の要職を務めていました。又、信玄堤の工事を成し遂げました。
・畑の横の、山縣昌景公墓に、真直ぐに伸びる細い農道が、設楽原の決戦当時の幹線道路の【三州街道】です。

地理感覚に優れた領域支配の行政官僚
原隼人佑昌胤
（？～天正3年5月21日）

・信玄塚の小松より原昌胤墓を遠望➡
農道は、当時の三州街道です。
・信玄塚小松より

【傳五味与惣兵衛貞氏の塚】謎の塚
設楽原に倒れた戦国の武人たち

㊗ 律義にも塩瀬が残す　五味の首塚

・伝五味貞氏の墓
八束穂　赤ハゲ

・五味与惣兵衛貞氏は、鳶ヶ巣山の中山砦で、酒井忠次率いる連合軍の奇襲攻撃で敗れ討死にしたとされているが、塩瀬久兵衛により理由は判らないが、武田勝頼の【才の神】の戦地本陣の近くのこの地に葬られた。

その首塚が、豊川をへだてたこの地にあるのは確かに不思議な事です。

【五味貞氏の塚へのタイムスリップ】
場所　新城市八束穂字藤谷

・東郷東小学校の裏門から、須長の集落に向かう途中の、左岡上に在ります。謎の塚の看板が、道路から見えるように立っています。勝頼公観戦地の【才ノ神西の位置】です。

・五味貞氏の、子孫は、諏訪湖の周辺に多くいて、毎年のように【子孫の会】で、この場所を訪れ回向を手向けます。碑面の【傳】は、墓と伝えるということを意味しています。

☞設楽原決戦場まつり戦没者供養

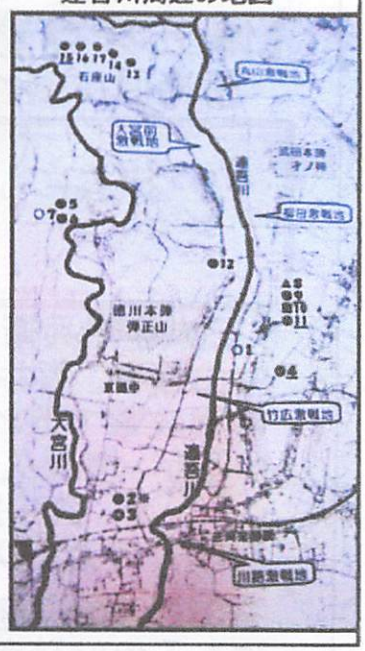
設楽原決戦場まつり　戦没者慰霊供養（信玄塚）

【戦いはなぜ連吾川で行われたのか】

ぬ　ぬかるみに
　　馬もしりごむ連吾川

・東郷中学校長
竹広　元壌

・連吾川周辺の地図



・設楽原の中央を、ほぼ真っ直ぐに連吾川が流れています。図の中の黒い線です。この左横には、大宮川が同じように豊川に流れ込んでいます。大宮川は蛇行が激しくのこぎりの歯のような形状をしています、火縄銃を使用する馬防柵を築くには適していません。なぜなら味方の兵士に、火縄銃の玉が当たってしまいます。

・連吾川と、この【鰻の寝床】の様な狭くて細長い【設楽原】の地形が、武田騎馬隊の動きを止めて織田・徳川の連合軍に大きな勝因をもたらした要因だとも云われている。

・連吾川は、柳田川、弾正川、連吾川と川の流れる村落の名前が付いていましたが、現在は総称して【連吾川】です。
こ小さな小川が、織田・徳川連合軍が弾正山に築いた、陣城のお堀の役目を果たしました。

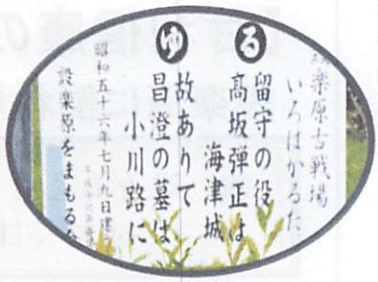
・連吾川は、竹広の古文書によると、寛永7年（1667）に柳田付近で水田灌漑の為、上側に新川が出来ました。
豊川用水により灌漑の役目を失い、昭和になり無くなりましたが、所処に川の跡を見ることが出来ます。

馬防柵の版画

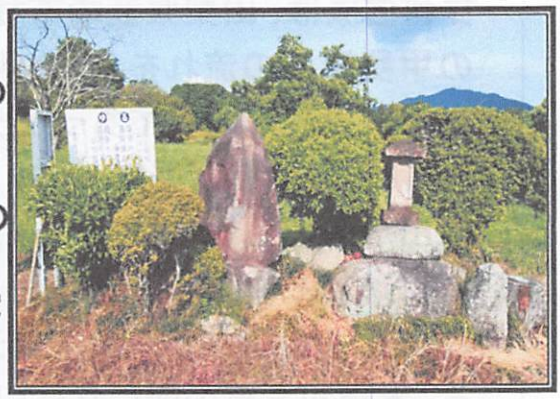
設楽原をまもる会作成のテレホンカード

【高坂源五郎昌澄の塚】・謎の塚
設楽原に倒れた戦国の武人たち

る　留守の役　・川路小川路
高坂弾正は海津城



・高坂昌澄は、長篠城の監視の部隊を率いて有海原辺りで戦死したと伝わる。その塚が川路の小川路に在るのは、設楽原の苦戦を聞いて応援に駆け付けたのであろうか。父親は武田の名将として名高い【高坂弾正昌宜】です。高坂弾正は甲斐の国の留守部隊の指揮官で、この戦いには参陣していないが【武田軍敗北】の報を受け、国境の駒場まで主君の武田勝頼を迎えに来ています。

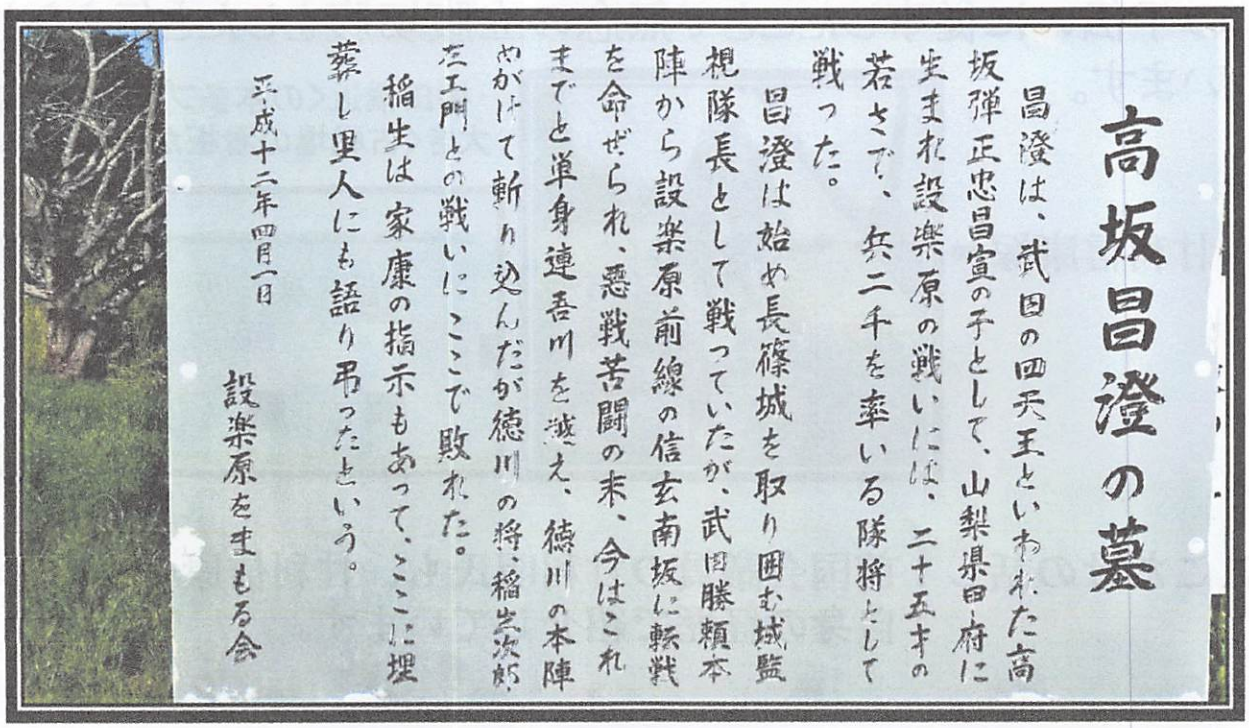


【高坂昌澄への塚のタイムスリップ】：昌澄の父は『甲陽軍鑑』の筆者とされる高坂昌信で武田24将の一人です。

場所　新城市川路字小川路

ゆ　故ありて　昌澄の　墓は小川路に　・高坂源五郎の墓　川路　小川路

・・川路集落の国道151号線から、豊川へ向かう道は、勝楽寺横：郵便局右：駐在所左と、この大宮川近くの高坂昌澄の塚へと向かう4本の道があります。迷わないよう探してください。



高坂昌澄の墓

昌澄は、武田の四天王といわれた高坂弾正忠昌宣の子として、山梨県甲府に生まれ設楽原の戦いには、二十五才の若さで、兵二千を率いる隊将として戦った。

昌澄は始め長篠城を取り囲む城監視隊長として戦っていたが、武田勝頼本陣から設楽原前線の信玄南坂に転戦を命ぜられ、悪戦苦闘の末、今はこれまでと単身連吾川を渡え、徳川の本陣めがけて斬り込んだが徳川の将、稲生次郎左エ門との戦いにここで敗れた。

稲生は家康の指示もあって、ここに埋葬し里人にも語り弔ったという。

平成十二年四月一日

設楽原をまもる会

【甘利信康の塚】

設楽原に倒れた戦国の武人たち

を 雄々しくも 立ち腹
さばく甘利信康

・甘利信康之碑
八束穂　柳田の辻

・甘利信康は、山梨県韮崎市甘利郷の甲斐源氏の流れをくむ家柄で、代々武田氏の重臣であったと云われている。山縣昌景隊と共に、武田軍の左翼隊として戦い、武田軍総退却となり立ったまま【無念の立腹切腹】をしたと云わる。看板がお墓の隣に立っている。

【甘利信康の塚へのタイムスリップ】

場所　新城市八束穂字天王：柳田の辻

・甘利塚は、設楽原歴史資料館から、馬防柵再現地に向けて坂を下った交差点の右側の位置に在ります。

・山梨県の甘利郷には、武田家発祥の【武田八幡宮願成寺】が在ります。このお寺は、ノーベル章の受賞者の大村智博氏の菩提寺でもあります。甘利信康は、設楽原の戦いでは、武田軍の左翼隊に属し、天王山の麓のダンドウ屋敷付近に留まり奮戦むなしく、頼みの村人が馬防柵の手伝いに従事したことで無念の立腹切腹をしたと伝えられています。

甘利信康塚➡

・柳田橋近くの本多プラス㈱竹広倉庫
大きく古戦場の看板が張られています。

ここだけの話し：前国会議員の甘利明氏も、甘利信康の子孫です。
自身の経歴で紹介しています。